

## ねがいのいえニュース 第2号

生活支援ハウスねがいのいえ広報紙・2003年11月11日発行

発行責任者：藤本真二 〒331-0071 さいたま市西区高木 185-29

Tel (048) 626-1909 Fax (048) 626-1920

E-mail [negainoie@r6.dion.ne.jp](mailto:negainoie@r6.dion.ne.jp) Hp <http://www.negainoie.com>



朝夕の冷え込みを感じる頃となりました。

お客様がじょじょに増えてきたねがいのいえですが、障害児デイサービスも始まり、忙しさも一気に加速してきました。11月からは新しいスタッフも加わりお客様をお待ちしております。心優しいスタッフたちにどうぞ会いに来てください。

今回も、お客様とのふれあいの中で目にした様子と感動を、そしてスタッフ自慢として、ねがいのいえのスタッフがどんな人たちなのか知っていただけるエピソードをお伝えします。

### 支援費による児童デイサービスが始まりました。

他のサービスと区別するため、グループ名称が「のっぽさん」に決まりました。就学していないお子さんの日中活動や、学童の放課後活動と、それぞれのスタイルに応じた方法でさっそくご利用されています。希望される方はご連絡ください。

### ホームページができました。http://www.negainoie.com

ダイアリーには毎日の過ごした様子を掲載しています。ご意見、ご感想は掲示板にご自由にお書きください。

### 和真くんの乗馬

桶川からの利用者第1号は、ただものでないエネルギーを発する豪快なばあちゃんと一緒に来られた和真くん。重度障害の和真くんは自分では動くことができないが、表情のとても豊かなかわいいお子さんである。ばあちゃんに体を揺すられたり、声をかけられたりすると素敵な笑顔を見せ、声を出して反応していた。ご家庭の事情でサービスを使いたかったのだが、桶川には事業所がなかったため、ばあちゃんが2年越しで何とかして欲しいと市に訴えつけてきたそうである。そんな事情から役所を訪れたねがいのいえがすぐに桶川市の指定を取ることができた。

そんなご家庭の主なご要望は、月に2回の乗馬サークルへ付き添って欲しいというものだった。障害者乗馬は10年程前から初めて日本でも紹介され、全国各地で展開されるようになった。馬の優しさは知的障害者の情緒を成長させ、馬の背が育むバランス感覚は肢体不自由者の緊張を取り除き、筋肉を発達させるそうである。東松山に障害者の乗馬サークルがあったことは新聞でも紹介された有名な報告で、一度はのぞいて見たいと常々思っていた。そのクラブを立ち上げたメンバーの中の1人が和真くんのばあちゃんだった。

10月よりさっそくその乗馬サークルへの付き添いが始まった。

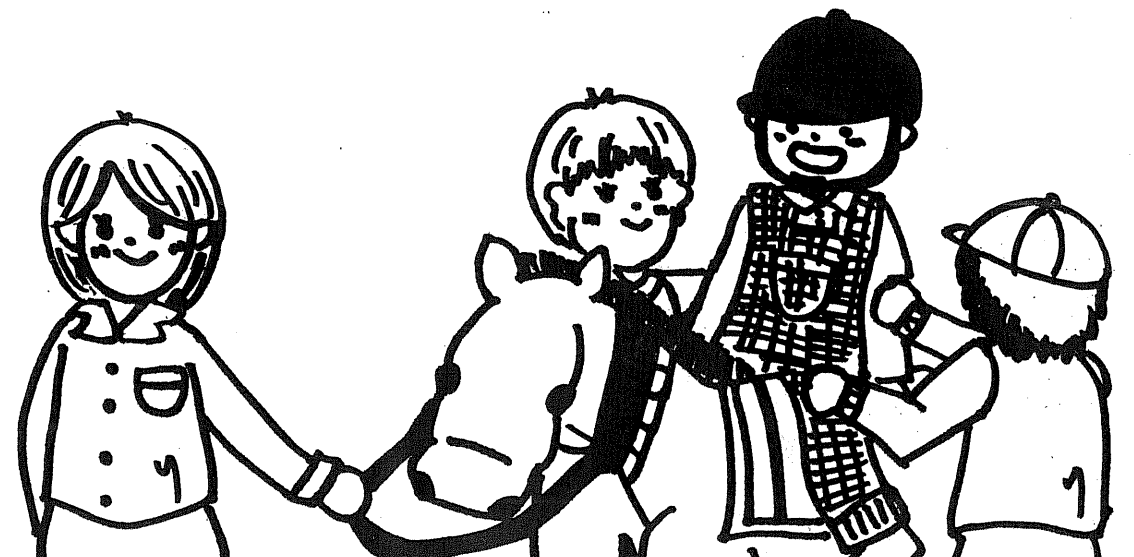
407号沿いの東松山で有名な馬頭観音に、その馬がいた。さまざまな経緯があったようだが、ともかくサークルで買った持ち馬で、毎週土曜日にボランティアのインストラクターに個人レッスンを1人20分受けているそうだ。

さて、和真くんの番である。イギリスの貴族のようなファッションで柵の中に入って行く和真くん。インストラクターと介助者に抱えられて、まずは馬の背に仰向けに乗せられる。はじめやや緊張した様子も見せたものの、次第に力が抜け、リラックスしている様子が遠くからでもわかった。次に腹ばいになってゆっくりと場内を回り、最後に介助者と一緒に馬の背に座って回ると、なんとということか、体の固い和真くんの背がすーっと伸びていくのだ。ものすごい効果だった。初めて目の当たりにした乗馬セラピーは衝撃的なほどの感動だった。

これだけ障害者乗馬が有名になった今でも、実際にやっているのはほんのひとりにぎりの人たちだろう。その感動的な世界が毎週ここで展開しているとは、まさに驚きである。主催する会の方たちは、誰でもいつでも来て欲しいとおっしゃっている。これはぜひ多くの障害者の方たちに体験していただきたい世界である。

連絡先を載せてもいいという許可をいただいたので、こちらに掲載します。ぜひ一度訪れてください。

比企ポニークラブ中島幸江様 TEL/FAX0493-34-5718



## スタッフ自慢 マチャコとヨッシー

見学に来られた皆さまに必ずお話することがあります。ねがいのいえの自慢は、新築の家でもなく、バリアフリーの設備でもなく、人材だという話です。「うちのスタッフは募集して面接で決めたりしません。施設で働いていた仕事ぶりを見てスカウトした人たちです」と、耳にタコができるくらい聞いた方もいらっしゃるでしょう。そしてその期待に答えて余りあるくらいに、スタッフたちは活躍してくれています。

初めて来られた多くの皆さまが、このスタッフたちに、お子さまがあつという間に慣れてくださるのをご覧になったことと思います。そして本当に優しい人たちだと言ってくださいます。以前勤めていた施設を退職し、給料が減るのを承知でねがいのいえに来てくれた4人のスタッフ。うち、同じ施設で働いていたふたりの女子スタッフを紹介します。

ねがいのいえを立ち上げる前、病院で看護師をしながら、資金を貯めるため休日も休まずにアルバイトに励んでいた頃、アルバイト先の障害者施設に彼女たちはいた。

利用者の方たちの目線で話そうとするヨッシーは、長身の体を低くして関わりをとっている姿が目にとまった。柔らかく温かい話し方だった。

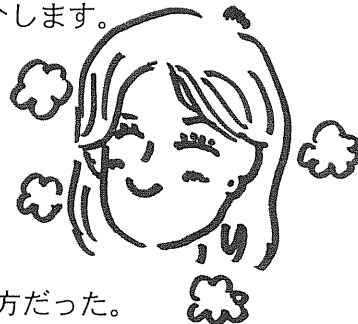
小さな傷で悲しんでいる利用者の方を保健室に連れてきたマチャコは、1枚のばんそうこうを貼ったあと、ひょうきんな仕草で笑いを誘っていた。弱った気持ちを慰める押しつけのない軽やかさ。絶妙な心のケアだった。

40代女性の利用者がいらした。知的障害だが自由に話し行動されていた。初めてお会いした時、とても難しい方だと感じた。関わろうとする女子職員を片っ端から怒鳴り侮辱しているかのようだった。そして嘘をつく。あの職員に蹴られた、この職員にいじわるをされたなど、およそあり得ない話を保健室で延々と語っていた。しかし男性は大好きで、若い男子職員の名前を出し、結婚するんだなどと、これまた嘘をつく。

お風呂が嫌いで、保健室に逃げ込んできた彼女を職員がかわるがわる誘いに来るが、かわいそうに皆怒鳴られて、「またあとで」と帰って行く。何人目かでヨッシーが来た。その瞬間、彼女の顔が笑顔に変わり、「この人好きなの」と教えてくれた。

ふだんの申し送りでも、「彼女が泣いていた時に部屋で30分くらい話をしたら寝てくれました」と夜勤明けのヨッシーが報告していた時から、この指導員は違うと感じていた。しかし、ふだんの様子を知らなくても、この場面をひとつ見れば、彼女とヨッシーがどんな関係を築いてきたか、はっきりとわかる。

決して押しつけがないヨッシーは、しばらく話したあと無理にすすめることなく出て行こうとしたが、ここは動く場面だった。このチャンスを逃したら彼女は今日お風呂へ入れないだろう。3人で行こうと誘って、めでたくお風呂場へ行くことができた。



どんな理論も技術も関係ない。利用者の皆さまを動かすのは、スタッフと作り上げたふだんの関係しだいなのである。

それにしても。彼女の心には一体何が潜んでいるのだろうか？ほとんどの障害者は年配になると穏やかになるのだが、この人はなぜこんなにいつも怒っているのだろうかと思った。あの嘘は、痴呆なのか、妄想なのか、しかし数ヶ月見続けてわかったのは、精神的な病気は何もない、ただの嘘なんだということだった。では、なぜ彼女は嘘をつくのか。何に対して怒っているのか。

最後によくたどり着いた答えは。確かに彼女はいつも誰かに怒っている。それは、自分をこんな体に生んだ親にかもしれない。または、自分はこんなに自由のない人生なのに、みんなはなんて幸せそうなんだろうという、世の中全体への怒りかもしれない。しかし、一番憎いのはおそらく、障害を背負った自分の体、自分の人生なのではないか。そしてそれは、言葉を持たない全ての障害者の気持ちの代弁なのかもしれない。

通常障害者は、思春期に最も激しい怒りのピークを迎え、20代のある時期から、じょじょに落ち着きを取り戻してくる。そこには、障害を背負って生きることへのあきらめや受容が感じられる。しかし、彼女のような年齢になってまだ怒りを持ちつづけている方は、やはり自分の経験の中では珍しいと感じた。

では、その彼女に対して一体私たちは何ができるというのか。

答えはひとつしかない。彼女の体が健常者になることはあり得ない。大好きな男子職員と結婚できることもたぶんない。しかし、毎日の関わりの中で、ほっとできる瞬間、この人がいたら安心できるという関係、24時間の中で、10分でも15分でも、そんな安らかな気持ちになっていただくことが、障害を背負った人生を支援する私たちの仕事である。

指導員の記録を読んでいた時、マチャコと彼女の関わりが書かれていた。ふたりでめだかの兄弟を歌っていた。「大きくなったら何になる？」とマチャコが質問すると、彼女は、「素直になりたい」と答えた。

マチャコが頭の中でどれだけ彼女との関わりをアセスメントしていたかはわからない。しかし、少なくともその一瞬彼女は素直になり、安らかな気持ちを感じていたはずだ。優秀なスタッフは理論など関係なく、本能的に関係を作っては、ひとすじの正しい道筋をつかんで ゆく。どんな専門書にも勝る感動的な記録だった。

そんなマチャコとヨッシーが、今ねがいのいえで毎日力を発揮している。子供好きのマチャコは新しい子供が来ると大喜びで近づいていくのだ。

ねがいのいえは今日も、そして明日も、感動的なシーンが繰り広げられてゆくだろう。



☺ 衣類・絵本・子ども用自転車など不要になったものでリサイクル可能なものの寄付をお願いします。